



Title	解脱上人の出られた家柄
Author(s)	内藤, 虎次郎
Citation	懷徳. 1934, 12, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88919
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

解脫上人の出ふた家柄

内 藤 虎 次 郎

私はついこの隣村の瓶原村と云ふ所へ近年住つて居ります者で、云はば笠置山の門前に住つて居ると申せば少し遠すぎるかも知れませんが、私の住つて居る所の山の上に海住山寺と云ふお寺がありまして、之は大變この笠置山とは關係の深い寺であります、先程から色々お話に出て居ります解脫上人と云ふ方が初はこの笠置山に居りましたが、晩年は海住山寸に移られ、そこで亡くなられた様であります。その間前の様な所に私は居るのであります。

この笠置の復興會と云ふものをお考へになる方々がありました時に、私が門前に居ると云ふ譯からか御相談がありました。大變結構な事でありますから早速御賛成申上たのでありますが、何分私は老人の事で一向之と云ふ働は出来ません。殊に近年はよく病氣を致しまして、今年などは春から度々病氣になり、先日も京都へ參つて入院した様な次第で何も働は出来ませんが、併し復興の主旨には大變賛成致し、今では賛成と云ふより殆ど自分の仕事の様に考へ、御一緒にやつて居る次第であります。

實は今日の講演會の講師は皆若いと申しましたが餘り若くはないかも知れませんが何れも私よりお若い様であります、そのお若い學者達がお話になるので、私は別にこれと申してお話致すこともなし、又今申した通り病後でありますのでたゞ復興會の代表者として、此所にお集り下さいました皆様方にお辭儀をしてどうぞこの復興會を援けて下さいと申すだけで役を濟ませて貰ふ積りであります。

所が佛教の方で老少不定と申しますが、お若い方でもどうかすると年寄より先になくなる人もあります、現に今日お話になる御約束をせられた橋川さんと云ふ方がありますが、京都大學を出られ、大谷大學の教授をして居りましたが、元來が坊様の出で佛教の事に明かな上、京都大學の方で國史を研究して居りましたが、この方が今日解脫上人の御話をして呉れる筈であつた相ですが、急に亡くなられました、未だ三十八九才で亡くなられたのは、實に大谷大學としては第一流の教授を失つた譯で洵に残念であります、今日ごなたかその代りにこの笠置山開山である解脫上人の事に就てお話があると思つて居りましたし、私は一向さう云ふ事は研究して居りませんし、今申した通りたゞ復興會の代表者としてお辭儀をしたらよいと思つて居りましたが、ごなたもその御話をなさらない様でありますから、私は一向何も研究は致して居りませんが、折角このお山で御話があり、又先程から後醍醐天皇の事に就て色々お話がありました、後醍醐天皇が元弘の騷動の時此所にお出になられたと云ふのは、此所に天皇がお出になつてよろしいだけの相當の伽藍がありましたからであると思ひま

す。その伽藍をお造りになつた解脫上人のお話がないのは何だか少し物足りない様に考へられますので、私の極く浅い智識で解るだけの事を一寸お話し致したいと思ひます。

解脫上人がこゝを開かれたと云ふ事位はこゝにお集りの方は大抵御存知でありませうけれども解脫上人がどう云ふ方であるかと云ふ事は餘り近頃の人は注意せられないかも知れません。承る所に依れば、このお山は近年非常に參詣者と申しますか、兎に角來られる人が多いので笠置驛には一年二十五萬人も下車せられる。之はこの近所では桃山御陵以外に一年にそんなに澤山の人が來られる所はなからうと思ひます。それは勿論後醍醐天皇の御威徳そのものが残つて居るのでありますし、又この復興會と云ふものも、その御威徳ある後醍醐天皇の御遺蹟を盛んにしたいと云ふ主旨であります。この後醍醐天皇のお出でになつた御遺蹟といふものは、解脫上人と云ふ方が此所に興されたお寺がありましたから、當時天皇がこゝにお出になつたのでありまじやう。

さうすれば私が今日解脫上人のことを少し申上げるのも餘り無意義ではなからうかと思ふのであります。

私は殊に解脫上人といふ方に共鳴を感じて居ると申しては少し失禮であります。少しばかりこの事を調べたいと思ひましたのは多少理由があります。この解脫上人と云ふ方は勿論御本人は非常に高德の方であります。併し不思議な事には、單に解脫上人お一人でなく、解脫上人の一家と云ふもの

は、當時に於ては天才揃ひと言つてよい家柄であります。今日の言葉で申せば優生學と申しますか、天才と云ふ者はさう云ふ血統から出ると云ふ説はこの解脫上人の一家が證明して居る様に思ふのであります。

今日皆様に申上げるこの解脫上人は有名なる少納言藤原通憲即ち信西入道といふ人の孫であります。この少納言信西と云ふ人の一家が不思議に天才の寄合であります。御承知の通りこの信西と云ふ人は保元、平治の亂に關係した人で、保元の亂には當時後白河天皇の方が重要な仕事をされて居るので、保元の後始末、處分と云ふものは信西入道の考でやつたのでありますが、その後平治の亂には殘念な事には當時平治の亂の張本人藤原信賴と仲が悪かつた爲に殺されました。之には自殺したと云ふ説もありますが、兎も角非業な最後を遂げました。この人は當時に於ては第一の學者と言はれまして、勿論この人は先祖から學問の家筋でありまして、信西入道のお祖父さんは季綢と申しまして大學頭となりました、今日で申せば大學總長で當時日本では大學は一つしかない、その大學頭になつた、當時に於て大學頭になる人は餘程立派な學者であります。その孫であります信西入道と云ふ人も非常な天才で大体支那の學問殊に政治に關係した學問、或は歴史に關係した學問に弘く通曉した人でありますが、その外に天文の事にも詳しい、これは今日の様に星の事を研究すると云ふ學問ではなく、天文により占をする學問、それから佛教の方にも詳しい。又人相等の學問にも通じて居つたので、九流

八家に通じて居といはれました。

恐らく當時に於てあらゆる本を讀んで居つたので、持つて居つた書物は信西入道書籍目錄と云ふものがありますが、之を見ますと當時それ程澤山の書物を持つて居つた人はなかつたろうと思はれる程であります、併し先程から中村さんのお話になつた様に、當時の朝廷の官職と云ふものは家筋の關係で任命されたので、この人は一生單に少納言從五位下の官職で終つたが、之は當時に於ては本當の公卿の地位には至つて居らないのであります。不思議な事は宇治左大臣賴長、之は保元の亂の張本人で惡左府と言はれましたが、この人は左大臣になつたが之も非常な學者であります、この人の日記を見ますと一々信西入道に敬服して居る、之程の學才の人は今日外にないと讃めて居ります。信西入道が少納言になつたと言ふ事も、之は天子にお願ひして、出家するからと申して漸く少納言の官を許されたのであります、さう云ふ不遇の地位で出家するのは殘念だとも賴長は日記に書いて居ります。この二人は當時に於て一番の學者であります、世の中の悪い時にさう云ふ學者が出ますとヒョットすると學者のすることに依つて世の中の騒が大きくなることがありますが、世の中の變り目に餘りさう云ふ偉い人が出すぎると世の中の變動が急激に來る事があります。平安朝の末年即ち藤原時代から院政時代にかけて世の中がだれ切つて居つたのを一轉する。その時勢を促したと云ふことは大變結構のやうでありまして、昔からの時勢を打壞し、新しい時勢にしたのはこの宇治左府賴長と信西入道の

居つた爲と思ふのであります。兎に角若しさう云ふ事で學者のした事で世の中が變つたと言へば、之は學者にとつては本望ではないこともありませんが、固より世の中が變ると云ふ事はよい事もあり悪い事もありまして、此の保元平治の亂が起つたため、朝廷は政權を失ふといふ大變動を來したのであります。

今申した通りさう云ふ時代で少納言信西入道と云ふ人は極く官位は低いが、當時としては一番重な役者として働いたので、單に政治上の役者としてではなく、當時一番の學才ある人として働いたのであります。所が今申しました通りこの一家は不思議に天才揃で、この人の子供には學者が非常に多い、男の子が十七人ありますが大變な數であります。その内で出家しなかつた人の方は少くして六人あります。十一人は皆出家致しました。その出家しなかつた人の中にどう云ふ人があつたかと申しますと、少納言入道信西の時、世の中が變り、それから後に子供達が世に出たのでありますから、それ等の人がどれ位優れた人であつたかと云ふ事は分り難いのであります。兎に角皆相當優れた人であつたと云ふ事は想像出來ます。長男の俊憲と云ふ人が相當の學者であつたと云ふ事は歴史にも見えて居りまして、後白河天皇の御人物を批評した語が残つて居りますが、後白河天皇は晋の惠帝のやうな暗君であらせられる、この方はきつと世の中の亂を起す天子であらせられると申して居りますが、さう云ふ事を預言する位でありますから、この人は相當學才もあつて親に劣らん皮肉の言へる方であつたと思

ひます。この人は文章博士になり、參議にまでなりました。

その外に源平盛衰記、平家物語で有名な人で櫻町中納言成範と云ふ人がある。この人は權中納言にまでなつたのでありますが、平家時代では出世した方であります。この人の學才の點はよく分りませんが、櫻が大變好きで邸内に櫻を澤山植ゑ、當時支那の風習が日本に傳はり、人間の生命の神様として泰山府君と云ふものを信仰した。之は今日に於ても叡山の西の麓に赤山大明神と云ふのがありますが即ちそれが泰山府君を祀つたのであります。

この人間の生命を掌る神を櫻町中納言が、櫻を大變愛する餘り、櫻は大抵一週間の命であるが、この人が歌を咏んで櫻の命を延して貰ひたいと泰山府君に祈つたので櫻が三七二十一日間咲いて居つたと云ふ有名な話が残つて居りまして、それから櫻町中納言といはれるやうになりました。之等の人が先づ出家をしない方で世の中に知れた人であります。

出家をした人には有名な人が多い、十一人の子達が出家したのでありますが、その中で特に五人は有名であります、併しこの五人の中にもはつきり事蹟の分つて居らない人もありますが、分つて居る人では叡山の坊様になつて雨乞をしたと云ふので有名な澄憲サヨシケンと云ふ人があります。それから醍醐イモリケンに座主になつた勝賢、それから興福寺の別當で、非常な學者であつた覺憲、高野で有名な明遍ミョウベンと云ふ人がある。大体信西入道は學問がりましたが、世の中の勢力を得るに餘程執着の強かつた人で入道をし

たと申すのも少納言にならない前から出家致したかつたが、その頃は日向守で、日向入道など言はれては少しも幅が利かない、それでは困るからどうか少納言にして頂いて入道したいと天子にお願ひしたと云ふ位で中々權勢に執着があつた。然るに子供には隱者の様な生活を好む人が多かつたと思はれます。高野の明遍と云ふ人は殊に隱遁を好んで世の中には絶対に出来ないと言つて、親父の十三回忌に當り兄弟からお前は有名な高德になつて居るから導師を勤めよと言つて來たが、隱遁した以上は親父の年忌にも出ないと斷つた位であります。兎に角さう云ふ人が多かつたが、醍醐の座主になつた勝賢と云ふ人は、座主になる位であるから、後白河法皇の信任も深く大變働いた人ですから、出家した人の内にも滿更隱遁家ばかりではなかつた譯であります。

解脫上人は信西の子の貞憲の子の一人でありますが、兄弟は大抵出家致し、五人程が坊様になつて居ります。

この人は先程勝田君のお話にあつた如く初は興福寺で修業致しましたが、その時解脫上人が學んだ覺憲と云ふ人は興福寺の有名な學者であつたが、之も信西入道の子で解脫上人には叔父さんに當る人であります。解脫上人は十一の時に出家して二十年間興福寺で勉強致しましたが、この人は前に申した矢張叔父に當る高野山の明遍の様な隱遁好の人で、世の中の權力に携る事が嫌で、或時宮中の最勝會の御法事があり、上人も呼ばれたのでありますが、供の人もなく、乗物もないと云ふので漸く人か

ら借りて、長く續く御法事でありますから中途でやつと列しました。その最勝會が終ると世の中が嫌になり、興福寺には歸らないで、この笠置の山に參り、岩窟に籠つて修業した様であります。これが廿九才位の時であります、それから長く此所に居られ、晩年の六年間は私の居ります所の海住山寺に移られ五十九才の時、そこで亡くないました。

この外に信西の一家の坊様達の中で有名な人は、櫻町中納言の成範の子の成賢で、叔父さんの勝賢の學統を繼いで醍醐の座主になりましたが、この人の雨乞は大變有名で、雨乞によつて僧正に任せられた程で、この人が禱れは何事でも利くと云ふので、二十年間に六十七回朝廷で修法を勤めたと云ふ事であり、この人に特別私が興味を持つて居りますことは勝賢にしても成賢にしても醍醐の座主になる位の人でありますから、有名な學者で今日でもこの人の著述が残つて居ります。

勝賢の著述は二三、成賢の方は十三種ばかり残つて居りますが、此等は醍醐にありませうが、これ以外に成賢の四卷の文集を不思議に私が持つて居ります、之は成賢が自筆で書かれたものでありませう。之は醍醐寺で大變大事なものでありませうが、明治の初年に外へ出まして、一時は京都で有名な山中信天翁が持つて居りましたが、後に私の手に入りました、かう云ふ關係で成賢といふ人のことを調べて見たいと思ひ、さう云ふ所から解脱上人の事も調べる事になつた譯であります、この成賢といふ人は大變な學者で解脱上人と同様に信西入道の孫に當る人であります。

この成賢と云ふ人は坊様で子供がありませんが、その兄弟の子の憲深と云ふ人があり、之が成賢に繼いで又醍醐の座主になりました。

以上述べました様に今日分つて居るだけでも信西入道の一家には非常に學者が多く、曾孫の代に至るまで學者が續いて出て居りますが、その中でこの解脱上人と云ふ方は特別に有名であると思ひます。醍醐の勝憲、成賢と云ふ人も有名でありますが、此等の人は朝廷に關係があり、信西入道が後白河法皇に信任された爲に、その點に依る所が大分あります。南北朝の頃東大寺に凝然大徳と云ふ學者がありました、三國佛法傳通縁起と云ふ、印度、支那、日本の三國に涉つた佛教の歴史を書きましたが、この人の書いた物の中に解脱上人の事が書いてありますが、興福寺の學問は唯識で、一方に於ては又戒律があります、戒律と云ふのは坊様が行狀を正當に守る法則であります、凝然大徳の言ふ所に依れば、解脱上人は叔父さんの覺憲の學風を繼いで居るが、其後南北朝に至るまで澤山法相宗で偉い人が出て居るが、皆解脱上人の學統の後裔である、悉く解脱上人の學問上の末孫にならぬ者はないと云ふ風に言つて居ります。それから戒律の方は奈良の西にある唐招提寺がその根本になつて居ります、保安の頃中川の實範大徳といふ人が招提寺の傳授を受け、それから四代目經て解脱上人が之を受繼いで、之も矢張り凝然大徳の出ました南北朝頃まで、それを傳つて居るのであります。又法相宗の唯識と云ふのは純議論の學問で、印度の佛教が最高潮に達した時出來たものでありますが、印度の佛教は

お釋迦さん以來發達致し、その理論に於て殆ど完全の域に達したのが唯識の學問であります。之を支那の有名な玄奘三藏が印度から傳へ、それが更に日本に傳はり今日に至りましたが、この唯識と戒律は鎌倉時代の初期に於ては解脫上人に依り維持されて居つたと申してよいのでありますが、それ程この方は偉い方でありましたから、當時此所に籠られた時も、上人は奈良、京都の様な煌かな袈裟、衣でやると云ふ事が嫌さの餘りこの笠置の山の中に籠られたのでありますが、併しその人の德に依つて此所に色々の伽藍が出来、その伽藍があつた爲めに後醍醐天皇が此所に行幸なると云ふ不思議な因縁があつたのであります。

解脫上人の著述は大變澤山残つて、近年段々出版になつて居りますが、私はとてもさう云ふものを研究する力もありませんし、又暇ありません、たゞ目錄位見る位で持つて居る本もありますが未だ碌々讀んだ物もありますが、兎に角私が見た目錄だけでも二十種近い物が残つて居ります。

解脫上人は奈良で法相宗の學問を致しましたが、當時奈良の學問は叡山の天台宗の學問と對抗して互に惡口を言つて居りました。それで解脫上人も叡山の攻撃をして、それが著述になつて居りますが、戒律は支那から渡つて來た鑑眞和尚が傳へたので、叡山で戒壇を奈良の方で大變争つて造つたが、奈良の方が根本であるから優れて居ると云ふ様な議論をして居られます。又天台宗の根本は法華經でありますが、この法華經に對する叡山の解釋は支那の天台大師と云ふ人の解釋に據るのであります。

解脱上人は敵の武器をとつて、法華經を研究し法華經口鈔と云ふ本を三十卷書いて居りますが、之に依つて叡山の解釋は間違つて居ると唯識の議論に依り、根本から打ち壊さうとしたのであります。かう云ふ風に學問鬭爭の方にも中々熱心な方で、當時に於ては恐らくその點で第一の學匠であつたらうと思ひます。

信西入道の一家からは天才が澤山出たのでありますが、その中でも解脱上人は殊に優れた天才の方であつたと思はれます。以上信西入道一家と解脱上人に關することではありますが、之に附加へてお話し致したい事は、信西入道といふ人は中々當時のハイカラであつた、宇治左府頼長の如きも當時のハイカラで、支那から新しい本を取寄せて見て居つた。丁度近頃の學者が西洋の本を盛に讀むのと同じであります。信西入道もその指導者であつた。それからその外に音樂に對する興味を持つて居つて、有名な靜御前の養母の礎禪師といふ坊様の様な名前の女が白拍子と云ふ舞を始めた、之は當時の朝廷の雅樂に對し、民間で流行を追ふて一種の新しい舞を始めたのでありますが、その舞の曲を作つた人が信西入道であるから面白い。

信西入道は當時の今様の新しい曲を作つて白拍子に舞をまはした、今日の言葉で言へば大にエロ的の所に大變興味を持つて居つた譯であります。そう云ふ方面にも優れた才能がありました。宇治左府の子に妙音院大政大臣師長といふ人がありまして、箏、琵琶の名人であり、其の著書が今日まで

傳はつて居りますが、この人は白拍子の舞を見て、あれは亡國の舞だと言つて居る。この人は大臣の家に生れた人で昔からの傳統を重するから白拍子の様な新しい舞が出ると、あれは實にけしからんと大いに憤慨したのでありませうが、今日でも丁度昔からの色々の音樂を知つて居る人が浪花節などを聴くとけしからんと言ふのと同じ事でありませう。信西入道は流石に民間の事情に通じて居りましたから新しい曲が世間に迎へられると云ふ事を考へたものと思ひます。今一つ不思議な事は皆様も御承知の通り、高倉天皇が大變寵愛された箏の名人小督局であります、高倉天皇の中宮が清盛の娘でありましたから、小督が邪魔になると云ふので追はれ、嵯峨に隠れたと云ふので有名な人であります。仲國と云ふ人が天子から寮の御馬を賜はつて嵯峨野に局を訪れて行くと云ふ一種あはれな平家の曲になつて居りますが、この小督の局が櫻町中納言の娘で、信西入道の孫娘であります、かう云ふように男の方も女の方も、この一家からは天才ばかり出て居るのでありますが、その中でも解脫上人と云ふ人は極く眞面目な當時の權勢等に拘らない點に於て餘程確りした人格者であつたのであります、又非常に高德の方であつた爲にかう云ふ山の中に居りましても、此所に堂塔伽藍が起つて、それに依つて後醍醐天皇が此所に御幸遊ばさる事になつたのであらうと思ひます。

今日笠置の遺蹟の復興は勿論後醍醐天皇の御遺蹟復興と云ふ事になつて居りますが、後醍醐天皇が堂塔伽藍を造られたのでないので、後醍醐天皇が暫く御滞在遊ばされた御遺蹟は解脫上人の德に因つ

て造られたのでその遺蹟を復興するのでありますが、毎年二十五萬人も來られるから、解脫上人の名前は御承知でありませうが、どう云ふ點で天子か此所に御出になつたかと云ふ事は考へられない方が多いと思ひます、私は海住山寺の門番の様な所に居りますのでどうかしてこの解脫上人といふ人の事をもう少し世の中に知せたい、而して同時に後醍醐天皇行幸の由來をもう少し世の中の注意を喚起したいと考へて居ります。それに就てだん／＼溯つて解脫上人の出た家を考へますと、日本歴史上信西入道の一家は天才揃で、研究上非常に面白い事がありますから大に注意して頂きたいと存じます。

この笠置のお寺は解脫上人の開かれたもので、此處に後醍醐天皇が行幸遊ばされたと云ふ關係を世に知らせ、この御遺蹟を残したいと云ふのが私共の一つの念願であります。

どうぞ此所へ御出になつた方の御助力に依り急ぐ事ではありませんからゆる／＼この復興事業を完成さして行きたいと存じます、どうか皆様方の御援助を御願ひ致します。

右は昭和八年六月五日懷德堂堂友會員が南朝遺蹟見學の爲笠置に赴き其途恭仁山莊を訪ひし時、「解脫上人に就て」と題し一場の講演を賜ひたる時用ゐられたる原稿なり、其の際別に原稿を賜はり度旨依頼し快諾せられたるも其後病牀に臥せられ、遂に御執筆を得ざる事となりたるを遺憾とし、當時の御講演とは異なるも、今回特に令息に請ふて本稿を登載する事とせり。

▲編者云本堂に於て故文學博士内藤湖南先生の講演せられたるもの
左の如し

- | | | |
|------------------|--------------|-------------|
| 一、履軒學の影響 | 明治四十四年十月七日 | (懷德堂記念學術講演) |
| 一、支那に於ける史の起源(十講) | 自大正七年二月至同年六月 | (土曜講演) |
| 一、山片蟠桃を憶ふ | 同十年二月 | (通俗講演) |
| 一、日支文化關係(九講) | 自同十年五月至同年十二月 | (土曜講演) |
| 一、富永仲基に就て | 同十年十一月 | (通俗講演) |
| 一、章學誠の史學 | 昭和四年十月 | (記念講演) |

